

チャンス・チャレンジ・チェンジ



秋田県立養護学校天王みどり学園 加賀谷 勝

気がかりなことを指摘された保護者の反応は？



満5歳児を対象にした健診や相談会を実施する市町村が年々増えている。秋田県では、内容や方法、回数等に違いはあるものの、現在16市町村で行っている。

課題の一つとして、結果をどのように保護者に伝え、子どもの具体的な支援につなげていくかがある。先日、5歳児相談を担当している方から、子どもに個別の支援が必要と思われることを保護者に連絡すると、3つのタイプに分けられるということを知った。



- 1 心配していない（支援を拒否する、今は受け入れたくないという気持ちが強いタイプ）
- 2 一緒に成長を見守ってほしい（変わることを期待しつつ、少し不安を感じているタイプ）⇒一番多い！
- 3 市が取り組んでいる幼児教室に参加する（積極的に支援を求めくるタイプ）

園や小学校の先生方からは、5歳児健診の際に、医師、臨床心理士、保健師などの専門家から保護者に子どもの気になるところを伝えてもらうことで、支援につながりやすいという声が上がっている。園では「何もおうちで困っていない」と言われる、小学校に入学してから伝えると「学校の対応が悪いから」と言われる、中学校や高校に入ってから伝えても理解が難しく支援ができないという声が聞かれる。家庭と園・学校では、子どもの様子が異なるため、保護者と先生方に温度差が生まれる。少しでもそれを埋めるためには、「乳幼児健診⇒5歳児健診・相談⇒就学時健診⇒新入生言葉の検査の結果」と、担任や保護者の気付きを点ではなく一本の線につながるよう、各市町村が早期から相談支援体制を整備する必要がある。

支援は周りの気付きと本人の自覚から始まる。

支援の成果＝支援を受ける人の気持ち×支援する人の気持ちである。



ママたちが非常事態!?



1月31日（日）、NHKスペシャル「ママたちが非常事態!？」では、現代のお母さんたちが、育児に苦しめられている原因を科学で探るといった内容だった。その一部を紹介する。

Q：子育てが孤独で耐えられないと感じるのはなぜか？

A：（1）出産直後、エストロゲンと呼ばれる女性ホルモンの分泌が激減するために、子育てに孤独感や不安感を感じてしまう。

（2）母親には共同養育の本能（みんなと協力して子育てする）がすり込まれているが、核家族化が進み、それができない環境になってしまい、一人で抱え込むことになる。

（3）夫が育児や家事に参加する時間が少ないために、母親のイライラが増える。

〈一日の中で夫が育児や家事に参加する時間〉

スウェーデン（3時間21分） アメリカ（3時間13分）

フランス（2時間30分） 日本（1時間7分）

（4）母性は生まれつきのものでなく、いろいろな体験をする中でスイッチが入り、妊娠して出産することによって本格的な母性が活動を始める。最近では、出産前に育児を見たり聞いたりする体験が少ないので、最初は戸惑って当然である。



Q：「イヤイヤ期」がひどいのはなぜか？

A：2歳～3歳ころは、まだ前頭前野（抑制機能）が発達していないため、目先の欲求に我慢できない。

10歳くらいまで、あるいは、思春期までゆっくり発達し、その後抑えられるようになる。子どもの脳が未発達なため起こるので、母親のせいではない。

最初から子育てができて当然と思うことは間違いである。なぜ子どもがこんなことをしているのか、理解できれば対処の仕方が変わる。大切なことは、育児中の母親の辛さを身近な人が理解して協力すること、そして、母親が悩みを一人で抱え込まない環境をつくることである。